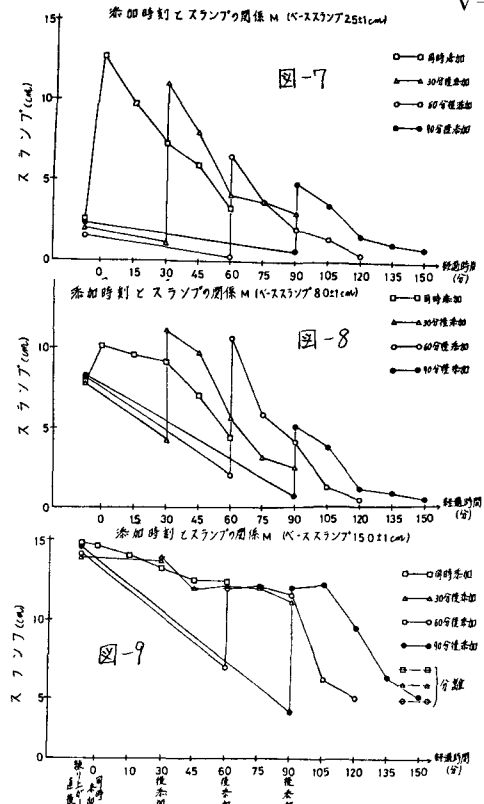
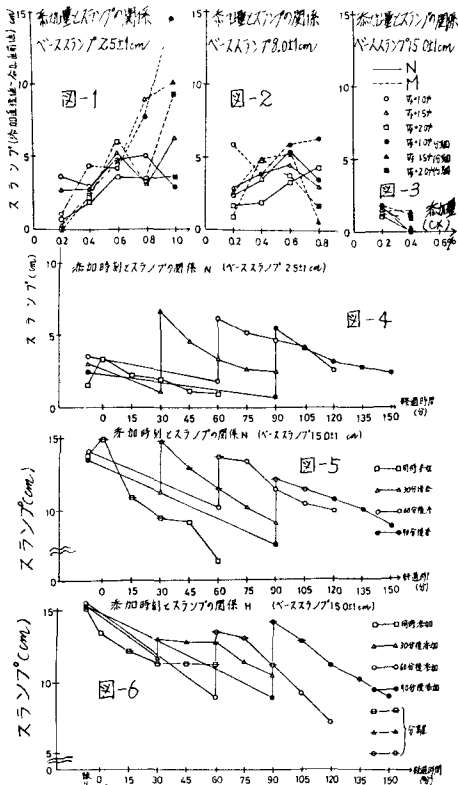




の時は同じく0.6 μ 程度まで添加できると考えられるが、15 $\pm$ 1cmのような軟練りのコンクリートには添加しても効果がないと同時に、材料分離などの悪影響を与える。実験(b)については、流動化剤Hを使用した時は、ベースのスランプ15 $\pm$ 1cmの場合の60分・90分後添加で、同じくNについては、ベーススランプ25 $\pm$ 1cm、15 $\pm$ 1cmの30分・60分・90分後添加でのスランプの回復に効果があり、Mについては、ベーススランプ25 $\pm$ 1cmの場合の同時添加と30分後添加のスランプの回復に、8 $\pm$ 1cmの場合では30分・60分後添加のスランプの回復に、そして15 $\pm$ 1cmの場合では60分・90分後添加のスランプの回復にそれぞれ効果が認められた。

4. まとめ

(1)流動化剤の添加量とスランプの間には単純な直線関係はないので、所定のスランプを得るための流動化剤の添加量を、3種類とも同一の方法では決定できない。

(2)流動化剤の多量の使用は材料分離などの悪影響を与えるので、その使用量に注意するとともに、ベースのスランプが15cm程度以上のコンクリートへ同時添加の使用は避けた方がよいと思われる。

(3)流動化の持続効果は、60分程度の短い時間では十分に保たれるし、また、使用した3種類の流動化剤のいずれでも、90分経過程度の後添加ならば、十分にスランプは回復する。

最後に、本研究は、昭和55年度・昭和56年度文部省科学研究費試験研究(1)の分担研究の一環として行なったものである。実験に際し、多大な御協力をいただいた丹羽宏育・杉山尚克・渡谷徹・三宅耕司・高井義信の各氏に感謝致します。

<参考文献> 小林一輔「繊維補強コンクリート(4)」土木施工19巻8号 1978